

令和6年度 泉大津市立図書館協議会

## ■第1回会議の議事概要

日 時：令和6年6月3日（月）午後6時00分～午後7時45分

場 所：泉大津市立図書館オープンセミナースペース

出 席：嶋田会長、阿児委員、岡本委員、澤谷委員、高島委員、高橋委員、谷合委員

公開の有無：公開

### 議 事

(1) 泉大津市立図書館年次報告書について

(2) 図書館評価について

### 議事概要

(1) 泉大津市立図書館年次報告書について

《主な意見等の内容》

事務局より泉大津市立図書館年次報告書について報告

岡本委員：まずこのように年報がまとめられたのは非常に良い。当たり前のことだが出だしが大事で、立ち上げて最初のほうにやらなければなかなかできないので、すごく良いことである。そして、この段階で報告書を出したことをちゃんと言ったほうがいい。実際にできている図書館は多くない。同時に、内容に関してはこれからフォーマット化していくことになるのではないかと。これは年々経ることによる面白みでもあるので、最初はあまりわかりやすいフォーマットに落とし込まずに、何を書いていくべきかを考えていただきたい。視察・見学・取材等の項目のところで、視察された団体や行政機関の名前が明記されているのは非常に良い。案外日本ではこれをしていないが、受け入れた相手先が、特に行政団体や政治家であった場合、行政報告や議会報告で相手側も公表しているので、受け入れ側もきちんと公表するほうがよい。伊万里市民図書館は7、8年ぐらい前から熱心にされるようになった。これだけの人が視察に来ているということは、この報告でも重視されているシビックプライドに関わるわけで、決して誰もが知っているわけではない泉大津市にこれだけ多くの人たちが日本中から来ているのを市民も知ることが極めて重要である。また企業の名前も明かされていることは、特に良いので書いていただきたい。明かされたくない企業もあるかもしれないが、税金を使って対応する以上明かして当然であるので、このように見える化されているのは非常に素晴らしい。

谷合委員：質問だが、ビジネス支援図書館推進協議会の見学は団体で来られたのか？ ま

た、ビジネス支援サービスの視点から何か意見があったか知りたい。

事務局：今年大阪市でビジネスライブラリアン講習会があったため、その準備の方たちが団体で来られ、ビジネス支援サービスに興味を持ってご覧いただけた。図書館で地域の企業や産業を見ることができるだけでなく、セミナーやビジネスライブラリアンが課題解決の手伝いをしていることの一連の取り組みを褒めておられた。

高島委員：年次報告書にデータのボリュームが多く掲載されているが、一点付け加えるなら、2023 年度にどのような活動を行ったのか、先ほど事務局から報告されたような概要があるとわかりやすいのではないかと。2023 年度で言うと、「キミと、よみドキっ！」と「まちぐるみ図書館マップ」は成果物としても完成しており、シーブラのコンセプトのなかで、年度ごとに力を入れたことがわかりやすくなれば、図書館が年次報告書に書かれている目標に向かって進んでいることがよりわかりやすくなる。すべてのデータに市民が目を通すことは難しいので、そのような文章があれば理解しやすくなるのではないかと。

事務局：今の時点で年次報告書の中に加えるのは難しいため、追記で見てもらえるよう工夫したい。

澤谷委員：ボリュームが去年の倍近くになっていて、これだけのことをしているのが漏れなく書かれているのはすごい。強弱はあっても書くのはいいことで、読書の普及にいろいろと繋がっていることが細かく出ていて良い。論文や表彰などもきちんと書かれていて、活動がどのように外へ出ているのかがよくわかり、7つのコンセプトが細かく位置づけられ、取り組みが目指すところもよくわかる。議会支援の部分で、連携が資料の展示にとどまらず、議員からもアクションが来るようになったのは大きい。一つお尋ねするが、実際の狙いと違って想定していなかったものが生まれた、というようなことがあれば知りたい。

事務局：例えば、単発で行ったイベントが泉大津のことを知ることに繋がっていたり、シビックプライドの向上にも関わっていたりなど、枠組みの中で見えてきたものがある。

阿児委員：データ集としては非常に優れているが、高島委員が言われたように、報告をまとめる段階で感じたことなど定性的な部分が入ってもいいのではないかと。また、視察に来られる際にはまず報告書を見ることが多いと思うが、報告書から更にシーブラの1つ1つのサービスを知りたいときに内容からのアクセスが厳しそうだと感じた。例えば、最後のページのほうにウェブサイトのURLを載せたり、イベントの詳細や取り組んできたことがわかるような案内を載せるなど、もう一歩あってもいいのではないかと。そうすればこの報告書が、シーブラの広告塔となって、全国に伝わっていくのではないかと。データ集としては非常によくできてい

るのもったいない。よくできているからこそ、期待を込めてその部分をお伝えできればと思う。

谷合委員：阿児委員の意見に関連してだが、過去のイベントや展示のページをウェブサイトからなかなか見つけにくい、どこかにアーカイブされているのか？

事務局：イベントのタイトルは年次報告書の前年度・前々年度に載せているが、写真は SNS に残っている。

谷合委員：自分が見学に行った報告書を上げる際に、正式なタイトルを確認しようと HP を見ても見つけることができなかった。せっかくなので終わった展示のページも残しておいてもらうことはできないか。

事務局：HP のイベントのページは都度更新しており、展示は SNS のみに上げている。

谷合委員：アーカイブ的な部分が弱いので過去のイベントのページが見られるようになっていけば、といつも感じている。また別の質問になるが、「地域の歴史・文化再発見講座」は国立歴史民俗博物館とタイアップしてまるとお願いしているのか？

事務局：そうではない。館長が国立歴史民俗博物館の연구원をしているので、研究の中でお願いしている。研究を市民に届けるという視点で、泉大津のことを再発見してもらい、且つ先生の研究テーマに沿ったものをお願いしている。

谷合委員：メンバーも豪華でテーマも面白そうなものが多く自分も参加したい。国立歴史民俗博物館としても社会に自分たちの研究の成果を還元できるすごくいい企画だと感心した。

事務局：時間帯も夜なので、最初の頃は歴史好きの方の参加が主で他は多くはなかったが、最近では大学生や若い世代が毎月定期的に参加してくれるようになった。長く続けることで周知ができ、皆さんの生活の中に入り込んでいるのを感じる。

岡本委員：谷合委員のイベントアーカイブの話を受けてだが、古い分のページはできないものか。今日開催しているものも明日には古いものになるので、きちんとアーカイブするほうがいい。そこにイベントの内容、講師の使った資料、もし残せるなら動画を残していくというふうにできれば一番いいが、容量の問題という話になるのだろうか。

事務局：おそらく容量の問題が一番大きくなってくる。いただいたアイデアをもとに、例え

ばイベント名をクリックするとチラシが表示されるよう、今の時点でなら図書館でもできるのではないかと。

岡本委員：自治体ドメイン上であれば、一定期間載せておくと国立国会図書館が収集するので、そこに拾われるということもある。また、デジタルアーカイブサイトに関して言うと、容量の問題を言われるのであれば、その事業者はデジタルアーカイブ事業から撤退してほしい。正直、WEBで今さら容量なんて関係ない。ほとんどタダに近い値段なので、このぐらいは何とかして欲しいし、もし容量の課題があるとしたら、次の事業者選定のときにしっかり条件にしたほうがいい。この程度のイベント情報であれば、100年分ぐらい載せられるぐらいでないかと。公式サイトに載せて一定期間残り、利用者がある程度前のものはデジタルアーカイブで見られるようになると、デジタルアーカイブの利用が促進され、いいサイクルになる。

高橋委員：学校的にすごくたくさんの人と繋がっているのが羨ましい。今、学校では教科書だけでは学びが不十分で、いろんなところと繋がって様々な人材に学校の中に関わっていただき、こどもの学びを深める時代である。小津中学校も推奨しているPBL学習をどんどんやっていって企業や研究者、大学の方に学校と関わってもらっているなかで、人を集めるのは学校の苦手分野である。精一杯やっているがどうしても限りがあり、報告書を見るとすごく羨ましい。いろいろなステークホルダーの人材バンクのようなものがあれば、学校も大いに活用することができるし、繋がっていくきっかけ、橋渡しをしていただけると非常にうれしい。

事務局：学校でも活用していただけるよう、たくさんの人を呼び込みたい。

阿児委員：イベントのアーカイブはとても大事だと考える。大変かもしれないが、図書館のイベントチラシ類も地域資料として集めていけば、特別な収集をしなくとも地域の様々な他の方々が行われているイベントと共に資料として置いていける。また、学校の先生方も講師名を見るだけでは全容がわからないだろうが、講師の経歴や顔写真、講演内容などが載っているチラシであれば探しやすいのではないかと。そうすると人材バンクとしてもシーブラがもっと大きくなっていくと思うので、プラスの仕事という形にせずイベント情報を集められる。

嶋田委員：これだけ多くの方々との連携協力の催しがあるが、連携先から見た評価や感想を断片的にでも聞かれたことはあるか。また提案だが、連携協同パートナー懇談会のように、部門ごとに集まってこれまでの振り返りと今後の展開について自由に意見交換をすれば、そこに集った方々のあいだで新しい取り組みや価値が生まれるのではないだろうか。

事務局：連携先との評価というのはとても面白いと思うが、皆さんを集めて、というのは物理的に難しい。せっかく図書館を機にいろいろな方向と繋がっているのに、それをまた大きく繋げられるような仕掛けが今年度できるといい。

谷合委員：先ほど高橋委員が学校は人材を調べるのが難しいと言われていたが、人材データベースのようなものは作っているのか。

事務局：一つにまとめているものは特にない。

谷合委員：これだけものすごい数のイベントを3年もやってきているのにもったいない。ドーンセンター情報ライブラリーは、一回でも講師に来てもらった人をデータベース化し、毎年更新される。紙ベースで毎年変更がないか照会が届き、メールやFAXで返信をする。そのデータベースがとてもよくできているので、そういったものを作って学校とも共有できれば使いやすいし、館長の人脈を社会的に共有できるといいと感じた。

事務局：イベントごとに講師一覧は作っているのに、それを組み合わせてデータ化したい。

澤谷委員：これまでのイベントをオープンデータにすれば、そこからデータベースを作ってくれる人が現れるのではないかと。リンクが貼れるところはリサーチマップなども活用できるので、泉大津市立図書館に都度聞かなくとも講師の講演テーマなどはとても参考になる。

岡本委員：澤谷委員が言われたことは是非やっていただきたい。私も拝命している総務省の地域情報化アドバイザー制度ではアドバイザーのリストをオープンデータにした。その結果、アドバイザーの中でもかなりできる人たちが、勝手にデータベースにしてくれている。それはすごくいいことで、総務省は手を動かす必要がない。役所なのでデータをきちんとするのは総務省の仕事だが、その後で我々が使いやすいとする。実際に今、アドバイザー派遣を望む方はほとんどがそちらのデータベースを使っていると思う。そういうのが今風なやり方でいいし、本当に役に立つデータベースになると考える。

高島委員：図書館評価のところで、ほとんどがAとBだが、読書に関わる場所はCが多い。昨年度もCで、市民としては残念に思っていると話をした。2023年度は大きな数字なので2024年度からこの数字も小さくなり、評価のほうも今年度は変わると思うが、泉大津市は読書量日本一を目指すと公言している。元々の設定された数字も意味ある数字と考えるので、数字だけで評価をするものでなくとも、もう少しいい数字に持っていきたい。これに関係するとも思うが、学校図書室との連携で利用の多い学校と全く利用されていない

い学校との差が気になった。図書館からはいろいろなサービスを学校に広報し、先生方が利用しやすい体制を整えているとは思いますが、実際として利用されていない、貸出件数が少ない理由を探ってもいいのではないかと。また、学校支援サービスの利用率が高い学校はシーブラの利用も多いのか、データとして紐づいているのか興味がある。

事務局：学校支援のところで、学校名や園名を出すことについては如何なものか考えた。今回この年報を元に学校を管轄している指導課と話を進め、年間を通して図書館の資料をどう授業に使っていただくか、使っている学校と使っていない学校との差があるということは子どもたちが触れる資料に差があり、決していいことではないときちんと話をできているので、今年度はこの数値が大きく変わると思っている。また貸出冊数などは、2023年度までは開館前に図書館の面積などを元に設定し、実態に沿った数ではないためCとしているが、貸出としては出ないが動いている資料もかなりあるので、どう評価に繋げていくかをこの後で議論をお願いしたい。

岡本委員：数字の話で言いにくい部分もあると思うが、決算および予算のところと関連性を持たせて踏み込んで議論したほうがいい。物事を進めるには財源が必要で、財源がどの程度変動しているかが政策にどう影響を与えているか、論理的に整合するはずである。ここがきちんとリンクして動いているかが気になる。はっきり言えば明らかにリンクしていない。この程度の変動というのは実質賃金などの上昇を考えると減っていると言っている。今、2年に渡って実質賃金は下がっており、物価上昇に対して追い付いていない状況は常に報道されているとおりである。これはサービスの的にはシュリンクするほうが当然で、逆に伸びていれば大したものである。しかも伸びている理由は気持ちの問題、職員が頑張るという気合いの方向に行くのは極めてまずいので、ここは政策としてきちんと検証すべき点だと考える。もちろんこれだけの税金の投資をされるのが、この結果に対して見合っているのかという議論はあっていいし、そこは厳しく市民の評価を仰がなくてはならないが、ここをリンクさせて考えなければ危うい気がする。日本の図書館でこのあたりを議論しているところはないので、これはやりましょう。実際に直面してきている問題として、こんなに安ければ公共サービスとして成り立たなくなってきたのが現実だと思う。泉大津の場合、前にも言ったようにせっかく規模が小さいからこそ、思い切った全力投資ができる良さもある。これが100万都市だったら簡単にできることではないが、泉大津のサイズだからこそ振り切ることができる。だからこそ、決算・予算の数字と合わせていくという見方ができるといい。それをぜひ年報でも検討していただきたい。職員の立場で難しければ、そういうときこそ嶋田委員にコメントをいただくのも手だと考える。

### (3) 図書館評価について

《主な意見等の内容》

図書館評価について、事務局より説明

阿児委員：休館日の研修でスタッフからの評価付けをされたそうだが、普段の仕事にプラスアルファでやることはスタッフの負担が大きかったのではないか

事務局：休館日は毎回全員出勤で研修をしているので、2時間の研修時間を使って行った。紙で年報を配布してその場で書き込みをしてもらったが、すごく真剣に取り組んでくれて気づきの部分が多かった。また、その後の仕事の向き合い方などにも変化があったと感じている。

阿児委員：禁帯出の資料提供が数値化されていないことに驚いた。私は博物館で勤務していて当館にはライブラリーもあるが、基本的に一切貸出がない図書館なので貸出はゼロである。しかし、図書館利用をされていないかというところではなく、博物館や専門図書館であれば、一週間ずっと学生が自分の研究資料を調べていることも多い。その視点からアイデアをいただくといいのではないか。

谷合委員：参考資料がカウントされないのは仕方がない。エル・ライブラリーは貸出が少ないが元々冊数は気にしていない。どうしてもカウントをしたいのであればコピーではないか。申込書で申込枚数を見るしかない。そんなに面倒くさいことをするか、という問題も出てくるが、それ以外にあるのか。他には、禁帯出資料の棚のあたりにいる利用者の動きを見るぐらいしかないのでは、カウントできないのは仕方ないと思う。

澤谷委員：コピー機にはカウンターが付いていて、複写枚数は「日本の図書館」でも指標として存在する。禁帯出資料を区切らなくとも、切り口として複写をする人たちは貸出をせずに館内で使っている数値として挙げることもできるのではないか。

事務局：棚にアンテナを貼って資料の動きを見る方法もあるが、UHF タグの問題や費用が高額のため、借りてはいないが資料を使ったという利用者からの意思表示を簡単な方法で受け取ることができないだろうか。あまり館内に貼り紙などを貼るのもしたくないため悩んでいる。

岡本委員：この話は仕事柄よく相談を受けるが、費用の観点から難しい。その測定する費用があれば資料を買ったほうが良いというファイナルアンサーになる。税を何に投対して投じるかを考えたときに、より広い利用者が期待できるところに税が投入されるべきである。そういう意味では館長が言われたように、利用者の声をどう取るかということに集約した

ほうがいいのではないか。正直言って、禁帯出の資料を使う人は今後そんなに多くはならない。公共図書館としてはそれでいいと思うが、マーケティング的に言えば禁帯出の資料を使う人は間違いなくロイヤルカスタマーであり、本を出したり副読本や教科書を書いたり、地域社会に対する貢献度が高いと思われる。図書館評価としても結果としては重要だが、図書館はただ本を貸出だけではない。図書館を利用して地域や郷土の学習を深めた方が小学校の副読本を執筆されたら、何千人レベルに対して影響を及ぼす。そう考えると、一利用者であったとしても尋常ではない大きな影響力を持つというのが、図書館のもう一つの重要な機能であり、そういう声を取ることに尽きるのではないか。では、どうすればいいかという、それはインタビューである。今どのように図書館を使っているのかインタビューを取って声を残し、図書館報でこのような利用者があることをお知らせするといいいのではないか。例えば、その人が社会教育委員や校長でこんなことをしている、などの声があれば充分評価材料にできる。ライトユーザーに対しては、ユーザーサイドから何らかの簡単なアクションをしてもらうのが手ではないかと考える。澤谷委員が言われたコピーに関して言えば、全体的な動向とは言い切れないが、少なくとも 10 年 20 年スパンで見ると館内コピーは減っているはず。持って帰ってカメラで撮ればタダである。館内複写をしているということは基本的には貸出利用はない資料利用形態であると考えられるので、完全にイコールではないが比較的近似値と見ていいのではないか。そのぐらい館内で完結したいというニーズがある、あるいは貸出を利用しない館内利用は明確にあるので、そういった人の動態はこの数字に表れていると言っていい。

高橋委員：図書館というテーマからは離れるかもしれないが、今学校では評価というものを見直そうという機運が高まっている。以前、子どもたちにどんな評価をして欲しいかを聞いたところ、子どもたちは先生からの評価はもちろんだが、友達や親など客観的に誰かから評価をして欲しい。そして最後は自分で評価をしたいと言っていた。それを叶えるにはどうしたらいいのかを研究中である。教師の認識としては、学期に 1 回または年に 1 回の通知表を渡すが、それを今さらもらっても、というところがある。それならば通知表をデジタル化して、単元が終わるごと、テストが終わるごとに成績をパソコンに入力していけば、AI がこどもの今の成績を絶えず抽出し、弱点を答えてくれるようなシステムができるのではないか。そこで今現在の評価、今現在の課題がすぐにわかって行動に移せる通知表を作ろうと動いている。図書館も利用者がその場で絶えず評価できるようなシステムであれば面白いのではないか。

阿児委員：高橋委員の意見に賛成である。図書館評価ではないが、以前に「キミと、よみドキッ！」の評価のとき、成果判断の場を年に 1 度設けるとしており、読書の場面を見たらシールを貼ってもらってはどうか、という話をしたが、それをずっとやればいい。例えば、シープラに来て気になった本を最後まで読んだ、グループワークで図書館に来て資料を活



用して宿題が完成した、などシールを貼り、毎回何かアクションできる場所があってもいいのではないかと。今はアクションができる場がないので SNS で書き込む人もいると思うが、それを後から集めるのはとても大変なので、その場で評価ができるというのはいいアイデアである。事務局からの説明にもあったが、商用データベースの利用が昨年比べて 3 倍ぐらいに増えているのは、まさに利用者の動きを見ているわけである。1 年経ってそういえば増えていました、というわけではなく、利用者の動きを見て、スタッフの意識がそこに向かって見ているからである。特に自分たちがどう変化したかを、常に自分たちも見ているわけなので、当たり前にしていくといいと感じた。

岡本委員：関西国際空港や大阪国際空港のお手洗いなどに、使用したときに感情表現を押す機械が設置されている。それがどれだけうまくいっているかは試行錯誤だが、何か小さなものを付けて、ちょっとした感情を表現していただくような方法は有りだと思う。アナログなようだが数を集めるのが目的ではないので、わざわざそのひと手間を押してくれた人は、おそらく関西国際空港などは 1 回に対して 100 人あたりで見ていると思う。それと同じように考えればいいのではないかと。

澤谷委員：先ほども岡本委員が言っていたが、コアな利用者が図書館を使っていて本を出される、というような話もあると思うが、図書館に来ないかもしれないことを前提にして、メールフォームなどで「図書館を使って役に立ったら送ってください」というようなものを募集してはどうか。大阪市立図書館はデジタルアーカイブを利用した人たちに、「オープンデータの活用事例をおしえてください」というページを HP に設定している。実際はもっと多く利用されているとは思いますが、月に 1、2 人思い出したように入れてくださるので、それを岡本委員が言われたように総数は掛ける 100 ぐらいを考えている。数を出すというのが目的ではなく、こうした事例があることを示せて、声を拾えるのでやっている。1 回送った方は次もまた送ってくれたり、オープンデータを使いたいと言われる方にはこのページを紹介している。こちらが思っている以上にお知らせしてくれる。

事務局：館内に貼る、という方向ばかり考えていたが、岡本委員が言われたようにボタンを押したり、HP や SNS など気軽に求められるような場所を作る、というような方法も検討したい。

高島委員：図書館員による評価後の動きで「セミナー参加者への声掛けをレクチャ」とあったが、これは私自身も効果を実感しており、月に一度イベントをするなかで当日キャンセルが出ることもあるが、担当のスタッフが積極的に声をかけてくれる。そういう方がいると、イベントについても相談がしやすく、改善されていることもある。たくさんイベントが開催されているが講師側も何かしら思うところもあると考えられるので、イベントの前後など

に少し会話をして意見を聞いてもらえると、実現するかしないかは別としてその交流も評価の一つなのではないかと感じた。

事務局：声掛けが上手いスタッフは、お客様からも声を掛けられやすい。この会計年度任用職員は司書資格を持っている割合が少ない代わりに、他の業種でキャリアがあるスタッフが、声掛けやお客様の課題を聞き出すのが上手い、資料と結びつけるのが得意などそれぞれの特技がある。全員が同じようには難しいが研修を重ねていくことで、お客様にとっても講師の先生方にとっても気持ちのいい場ができていくといい。職員がこれまで感じていてもスタッフの意識に差があったが、今回自分たちで評価をしたことで同じレベルに意識を持っていくことができたのは大きい。

澤谷委員：年次報告書の数値が A=130%以上、B=70~129%、C=69%以下となっているが、何故その数字で設定されたのかについては共有できているのか。大阪市立図書館も数字を見ると、これは何故下がったのか、何故上がったのかを一つ一つチェックしてみたが、そうすることで単純に下がったから駄目だというわけでなく、相手との関係性で下がった、など数字の動向の背景がわかってきた。例えば、C 評価だが実質 C ではないというのがあったりするのか。

事務局：ABC 評価とパーセンテージの切り分けは、以前指定管理館で勤務していたときの評価の分け方である。スタッフ評価をするまでプラスマイナスを入れていなかった。しかし単純に B や C とするとモチベーションに繋がらなかったため、プラスマイナスを入れることで C にはあるが前年比からは上がっている、などがわかるようにプラスマイナスを入れるようになった。

岡本委員：登録率で 2023 年度目標が 24%で 2024 年度が 30%とあるが、絶対に有り得ない。枚方市が 10 年で 10%アップさせると発表しているが、まともに考えると強制しない限りそんなことはできない。年に 1%増やすのはものすごいことで、インターネットサービスであればできるが、来館型の一般サービスで年 1%上げるのは驚異的な数字。この設定が妥当なのかは見直したほうがいい。少し頑張れば達成できるような目標設定での評価ならいいが、現実的に無理な目標設定で C 評価になるのは働いている職員にとってよくない。同時に行政機構としてみると泉大津市全体で行政評価目標の立て方自体、レベルが低い。課税部門で年 1%徴税率を上げられるのかという話で、どんな部署でも 1%はコミットしないと考える。それが 1%改善することを目標にしているのかと思うが、例えば不登校児を 1%下げるとするのは無理である。個々の目標設定の指標に対して、そろそろ立ち止まってもいいのではないか。大体新館開館から 5 年が一つの評価だが、3 年目ぐらいで 1 回見直してもいいのではないか。例えば、館内利用がけっこう多いことも開館してみてわかったこ

とである。今年度は目標を達成しようと追いかけることも大切だが、行政評価以上に大事な  
のは市民の公共福祉、パブリックグッドが活きているかが問われるべき。5年間このまま走  
り続けるよりは、ここで一回本当に現実的かを見直したうえで、その観点から議論したほう  
がいい。

嶋田委員：教育文化部分は質的評価が難しいという紋切り型でやろうとしないところは私  
の経験上もそうだが、来館者満足度調査もどう問いを立てて質的評価を真剣に考えていく  
ことが我々の領域の政策部門では必要と考える。大学研究者の中でも住民が図書館をどう  
評価するかを科研費で調査しているグループもあるので、泉大津市が先陣を切ることも期  
待できる。このテーマから少し外れるかもしれないが、以前から話題にもなっていたまちぐ  
るみ図書館マップもできて、官民力を合わせて資料・情報とのタッチポイントも増えてきて  
いると思う。泉大津市は 16 平方キロメートルぐらいの面積で比較的サービスがしやすい  
のではないと思うが、サービスポイントとして町丁単位や学校、地区別の利用統計や地域  
間格差も含めて図書館の利用で気になっているところはあるか。

事務局：町単位で利用数は出すことはできるので数値としては持っている。やはり近くの方  
は利用が多く、旧図書館近くの方も図書館を使い慣れているのか傾向としては多い。しかし、  
こどもが 1 人では校区外に出られないこともあって、図書館整備のときにまちぐるみ図書  
館構想があり、市内のいろいろなスポットで本に触れられる機会とプラスして学校図書館  
の地域開放をして地域の方に学校の図書室を使っただけではない。そこに市立図書館か  
ら予約資料の配送や返却本の受取などを少しずつ始めている。市立図書館から一番遠い学  
校をモデル校として始めているので、それがすべての小学校区でできるようになると格差  
が解消されるのではないかと考えている。

阿児委員：地域開放をしている小学校の図書館でシーブラのカードを発行することはでき  
るのか？

事務局：シーブラを整備するときに学校図書館のシステムと一緒にしたので、図書館のカー  
ドを一つにして学校のこどもたち全員がシーブラのカードを持っており、シーブラでも学  
校の図書室でも本を借りることができる。その場で発行ができるかというと、今はまだやっ  
ていない。個人情報の受け渡しと保管方法をきちんとできれば発行はできる。以前からずっ  
と言い続けているが、泉大津フェニックスでは毎年大きなフェスが開催され、かなりの人た  
ちが参加しているがそのまま帰ってしまうのがすごく悔しい。できれば会場に行ってカー  
ドを作りたい。個人情報の受け渡しさえクリアできればそれができる。フェスに限らずいろ  
いろイベントが市内で開催されているので、図書館から出掛けて行ってカードを作るこ  
とができるよう準備は進めている。

阿児委員：博物館は小学校からの見学などがあるが、図書館の見学もあるのか？

事務局：小学校3年生で公共施設を訪れるという単元があり、ちょうど5月がそのピークで全部の学校の3年生がシーブラに来ている。学校によってはカードを持ってきて1冊ずつ本を借りるところもある。中学校でも授業の調べものを図書館に行って調べるという宿題が出され、チームごとに図書館で調べていた。

嶋田委員：その他、テーマに関わらず何か他に意見や提案があればお願いしたい。

阿児委員：「キミと、よみドキッ！」の評判はどうか？

事務局：ワークショップに参加してくれた子どもたちが、形になったことをとても喜んでい  
る。全小学生・中学生はタブレットを持っているのでデータで送っている。保育園・幼稚園・  
こども園にはペーパーの状態ですべて1人1枚ずつ配布している。大人へのアプローチがなか  
なかにできていないので、いろいろな場面で配布ができるよう進めている。

高島委員：誰でも図書館で手に取ることができるようにはしていないのか？

事務局：図書館のカウンターに設置している。

岡本委員：手前味噌だが、私共アカデミック・リソース・ガイドと連携協定を結んで実証実  
験をさせていただいている。協議会委員としても申したいが、これが正解だ、決定版だと始  
めるよりも、やってみて失敗しながら学んで気付き、より良くなっていくというプロセスを  
企業も経験でき、同時に図書館側も一緒に考えていくことができるのが非常に望ましいと  
感じている。ぜひ公共団体としていかに民間企業と連携をするか、特約の企業の利益供与に  
なっていないかは気を遣っていただいていいし、そこに課題があれば遠慮なくご指摘いた  
だきたい。同時に、いろいろな立場の人が図書館に相談として持ち込めるようになると非常  
に嬉しい。何かあったら図書館に相談をしてみる、図書館でできないことは別の機関を紹介  
するなど展開されていくようになればいい。開館して3年足らずのなかで、このような取  
り組みがこれだけできている。試行錯誤と実践のうえに成っているということが、今回の提  
携側の人間としてもやはりありがたい。付け加えておきたいのは、横浜本社の事業者が泉大  
津でやっているという凄さだと思う。横浜市ではまずやってくれない。みんなそんなに関心  
がないなかで、泉大津がやるということは我々としてはここに来る理由になる。実はそれは  
非常に優れた、ある種交流人口の獲得やツーリストの獲得になっているので、そこは誇って  
いただきたい。

嶋田委員：まだ始められてわずかだが、目立ったコメントやリアクションはあったか？

事務局：どちらかという大きさなど課題のほうが多い。そういったコメントが溜まった段階でブラッシュアップしてタイプ 2 を作れたらいい。図書館イコール本ではない、と「キミと、よみドキっ！」の中にも書いているが、やはり情報を扱っているところでインターネット席に案内するのではなく、自身のスマホで見ただけのようなワンストップサービスを棚でできるといい。

嶋田委員：話は変わるが、岡山県の真庭市立図書館に「これ見てつくってん」という、手芸の本とその本を見て作った作品をセットで紹介している。電子書籍もそうだがデジタル情報になるとなかなか借りられないので、本の表紙見せのイメージで電子書籍の表紙にしている大学図書館を見たことがあるが、可視化するということは必要だと改めて感じた。難しいかもしれないが、この本やサービスを利用して課題を解決できました、ということやレファレンス事例の中から紹介したサイトなどを、事例ベースで見せることができないだろうか。「これ見て解決してん」みたいなものを実験していただくのはどうか。

高島委員：ボランティアについて確認したいが、2023 年度にボランティア募集をされているが、学校等への読み聞かせに関しては動きがないという話を聞いた。2024 年度に実施される予定はあるのか。まだ準備が整っていなくとも、現在の状況と今後の進め方をボランティアへ連絡する必要はあるのではないか。

事務局：読み聞かせについては学校からみらい応援隊に読み聞かせを依頼されているが、なかなか読み手がいないということなので、連携を図れないかを調整している。ボランティアの派遣にはまだいたっていない。

終了 19:45